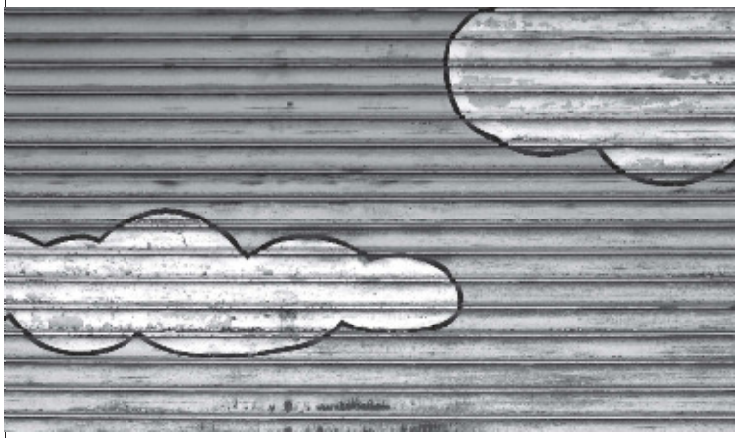
ことりフレンズ

鳥子酉雄



私は、文鳥のブンコ。お店のカゴの中で飼われている鳥なの。

私が居たお店は、水上ビルと言う所にあったらしい。お店にはお爺さんが居て、いつも店の表で私たちの餌をお皿の上に選り分けてくれていた。そこからこぼれ落ちた実をついばみに雀たちがやって来ていた。私は、話しかけたかった。「あなたたちはどこから来て、どこへ行くの？」

夏のある日、私たちはお店から別の場所に移された。そこはとても大きなカゴだった。そして、小さなカゴの中から放たれて、他のカゴに居た仲間と一緒になった。ジュウシマツちゃん、キンカちゃん、コキンちゃんたち。

これまでずっと別々のカゴに分けられて、お話ししかできなかったけど、今は同じ餌を一緒についばみ、同じ皿で水浴びして、お互いに毛繕(けづくろ)いだってできる。これで私たちもっと仲良しになれそうだね。

朝御飯の餌をついばみながら、ふと私はお爺さんの事を思い出す。「お爺さん、今頃どうしているかしら」

「大丈夫。きっとまた会いに来てくれるよ」

私より一回り小さなキンカちゃんが答えた。「でも、お爺さんの作ってくれた餌が懐かしいわ」

大きなカゴは、私たちにとってちょっとした楽園だった。羽根が囲いに当たるのを気にせずに飛べるって素晴らしい。しばらくすると、大きなカゴの中にお客さんたちがやって来るようになった。お客さんたちは大きな光る眼玉が付いた箱で私たちを狙う。「カシャンッ」何かを吸い取られたような気がした。最初は怖かったけれど、その内にそれにも慣れた。

秋も近いある日、大きなカゴの天辺まで来ると扉が開いていて、そこは青い天井の世界だった。

「あれは何？」

突然、舞い降りて来たジョウビタキが言った。「あれは空だよ。お前たち知らないのか？」

「空？　空って天井とは違うの？」

「天井って何だい？」

「天井は天井よ。そこより上に行った事は無いわ」

「へぇ、そんな事があるのかい、不思議だな。空はどこまでも上に行けるんだぜ」

「ええっ？」

「そんな事よりこっちに来いよ。そんな狭い所に居たら綺麗（きれい）な羽根が腐っちまう」

「駄目なの。空は見えるけど、ここはまだカゴの中だし、ここから出たら餌を貰えなくなるわ」

その時、キンカちゃんが言った。「ねえ、ここ通れるよ」

カゴに空いていた小さな穴から、小柄なキンカちゃんは飛び出して行った。

「キンカちゃん、戻っておいでよ、ここから出たら餌が貰えなくなるよ」

「ハハハ、高い高い。私、こんなに高く飛べたんだ！」

追いかけて連れ戻したかったけど、その穴は私が通るには狭過ぎた。やがてキンカちゃんの姿は空に吸い込まれる様にして消えていった。

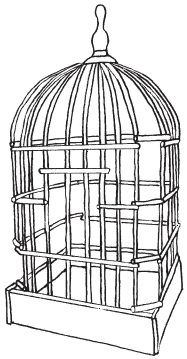
ジョウビタキは言った。「やれやれ、あんな小さな身体でろくに自分で餌も獲れそうに無いのに大丈夫かねぇ」「もっとも、俺は俺様の縄張りさえ荒らされなければ何があろう

と知った事ではないがな」
「ひどい、あなたが誘い出したんでしょ、キンカちゃんを連れ戻してよ！」
「フフフ、あいつが鳥の餌になろうと鳶（とんび）の餌になろうと、それはあいつの自由と言うものよ」と言うと、ジョウビタキは飛び去って行った。「キンカちゃん……」

来る日も来る日もカゴの天辺で、キンカちゃんの帰りを待ち侘びた。けれど、秋の終わりには天辺の扉は閉ざされて、その望みも無くなってしまった。そしていつしか、お客さんも来なくなり、私たちは大きなカゴから里親に引き取られて別れ別れになった。お爺さんとも会えなくなったけれど、里親はとても優しくて私は幸せな日々を送っている。でも窓の外を見る度、今でもキンカちゃんの事を思い出す。

また、大きなカゴの夢を見ていたみたい。さっきから何か物音が聞こえる。まどろみから目を覚ますと、窓に忘れもしない影が。「キンカちゃん……どうしてそこに？」
「何そんな狭い所にいるの？　ブンコちゃんもこっちにおいでよ！」
次の瞬間、私の足元から止まり木は消え、身体は宙をはばたいていた。「いったい、これは？」

「それより下を見てごらんよ、あれが私たちが居た水上ビルだよ」
そう言われて見下ろすと、そこにはいくつもの大きなカゴが折れ曲がる様にして並んでいた。
「雀たちはいつもこれを見ていたのかしら」
そして、お爺さんの事を思い出した私は、地上に向かってせいいっぱいの大きな声で呼びかけた。「お爺さん見える？　私たちこんなに元気に飛んでるよ！」
「空って素敵でしょ？」
「うん」
そうして私たちはどこまでも高く飛んで行った。



ビルケシ

本庄由幸

水上ビル通りを歩くのは、この街に引っ越して来たとき以来だから、二十年ぶりになるだろう。その時は、家族皆で来たんだっけ。おそらく、その時も買ったであろうコロッケと、その時は飲めなかったクラフトビールを持ち、はざま公園のベンチでひと休みしていた。

ベンチには、なぜか消しゴムが落ちていた。

学生の忘れ物だろうか。おそらく水上ビルの文房具店で買ったのだろう。

昔の感覚を思い出しながら、水上ビルを消すように空間を擦ってみた。するとどうだろう。目の前にあったビルが煙のように消えていったのだ。

慌てふためきながら、ビルがあった場所に立つと、そこはまるで最初から何もなかったかのように平らな土地なのだ。

近くを歩く人にこのことを説明しようと思ったが、どう説明すればいいのかわからない。このビルは、このビルにあった店は、住んでいた人は、ここの歴史は丸ごと消えてしまったのか。ふらふらしながら隣のビルに入っていき、壁を擦ってみた。ビルは、また消えていった。

私と一緒に。
そこには、消しゴムだけが残っていた。

看板犬の秘密の一日

佐藤杏耶

あるペットショップの看板犬は、とても可愛いと大人気。でも、その犬には秘密があります。それは、むかし人間だったということ。優しくてとても良い子でした。でも車にはねられてしまい早くも9歳で命を落としてしまいました。そして、生まれ変わって犬になってしまったこと。それら、すべてが看板犬の大切な秘密でした。

そんなある日、看板犬の9歳の誕生日でした。遂に前の自分が亡くなった9歳の誕生日か……、と思っているといきなり目の前が真っ暗になりました。いきなりの出来事に驚いていると人影がうっすらと静かに現れました。

そして、「今日は君の二回目の誕生日だね。おめでとう。そんな君に良いプレゼントをあげるよ」と看板犬に言いました。何のことなんだ、と考えているといきなり体がまぶしく光り、犬の姿が人間の姿に変わりました。

驚きを隠せずにただ呆然と口を開ける人間に人影はまた、「気に入ってくれたかな？けれど、これは一日だけの夢だからさ……、一日が終わったら……最後は九年前と同じ結末にしてよね」とだけ呟くと静かに消えて行きました。一日くらいなら許されるよね。と笑うと自分の居場所へと一歩踏み出しました。

「おい、早く来いよ」

その声で目を覚ますと、当時の友人がそこに立っていました。そして看板犬だったはずの彼は、うん！と元気よく声を出して力強く友人へと踏み出しました。それからはいつもの駄菓子屋でお菓子を買い、食べたり花火をしたりして一日を楽しみました。

「もうそろそろ帰ろうぜ」という友人の声を聞くと覚悟を決め、赤信号の横断歩道へ駆け出しました。友人の叫ぶ声に「一日だけだったけどすごく楽しかったよ。懐かしい時間をありがとう」とだけ呟やき楽しい特別な時間は、静かに終わりを告げました。

眼が覚めるとそこはいつもと同じお店の中でした。姿もちゃんと犬に戻っています。外を見るとたくさんの人達が笑顔で通っていくのが見えました。ふとその中に花束を持った見慣れた顔が見えた気がしました。看板犬はその顔が誰なのかすぐに分かり、ただワン。とだけ鳴きました。

それからはいつもと変わらず人間はまた、看板犬となってペットショップをにぎやかにしていきました。ただ、看板犬の秘密が一つだけ増えただけでした。

独占インタビュー「水上ビルさんに聞く」　河合鉄夫

河合　さっそくですが、お生まれは？

水上ビル　生まれたのは昭和39年12月です。東名高速道路や新幹線は同級生です。ほら、東洋の魔女がソ連に勝って金メダルを取った前回の東京オリンピックがあった年です。

河合　お誕生のころは、どのようでしたでしょうか？

水上ビル　60軒ほどの卸し、小売り、食堂、専門店などの店があって、豊橋市長もお祝いに駆けつけてくれたし、賑やかなもんでしたよ。それがねぇ……。

河合　それが？

水上ビル　私が20歳を超えたころから閉店する店もでき始め、53歳になった今では、最初から続いている店は20店弱。新しく入店したところもあり40店舗ほど営業していますが、シャッターを降ろした店も多いですよぉ。人間の場合、歯が抜けたり髪の毛が抜けたりすると悲しいと聞きますが、私のようなビルでも同じ思いですよぉ。ホントに。最近は化粧ののり、いや、ペンキののりも悪いしなぁ。

河合　人間でいえば、50歳はまだ働き盛りですけど？

水上ビル　確かに、だけど、私より若い「開発ビル」や「名豊ビル」が生まれ変わるって話も聞こえてくるし、ビルの50歳は、もうだめなんでしょうかねぇ。

河合　いえいえ、最近頑張ってみえるという話もお聞きしますし……。

水上ビル　えへへぇ、そうですかぁ。お耳に入ってますぅ。実は、50歳を超えた私をこき使おうとする入店者たちがいて、最近、壁の絵、トリエンナーレ、商店街を使った劇、土日のバザール企画、Ｓｅｂｏｎｅと、老体に鞭を打っているんですよぉ。

河合　ですよねぇ、お聞きしてますよ。楽しそうなんですけど言葉だけでは分かり難いので、ご説明いただけませんでしょうか？

水上ビル　説明ねぇ……、説明、説明っと。私が説明しても分かり難いと思いますので、一度足を運んで下さいよぉ、一度ぉ。

河合　なるほどねぇ、実際に出かけて楽しめばいいんですね。

水上ビル　そうです、そうです。来て楽しんでくださいよぉ。ホント、楽しいんですからぁ。

河合　わかりました。イベントの時、また一度お邪魔することにします。

水上ビル　約束ですよぉ。約束、約束。信じてますよぉ、信じてますからねぇ。

河合　お約束します。それでは、お時間となりました。本日は単独インタビューを快くお受けいただき、ありがとうございました。

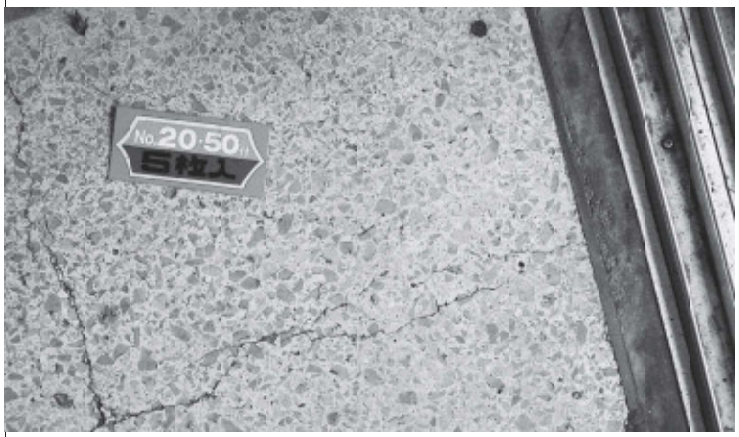
水上ビル　こちらこそ、ありがとうございました。50歳を超えて少し弱音を吐いてたけど、入店者の皆さまのためにも、２０２０年の東京オリンピックまでとは言わず、あと20年は頑張りたいなぁ。70の声を聞くまでは……ねぇ。読者の皆さんも、一度来てくださいよぉ。楽しいから。

「水上ビルさん」の今後のますますのご活躍をお祈りいたします。

（取材：河合鉄夫）

だがし屋さんのおばあさんの秘密

木下明美



あるだがし屋に一人のおばあさんが店番をしていた。だがし屋は、昔ながらのお菓子や今風のおかしを売っている。

ある日、一人の女の子がだがし屋にやってきた。女の子はおばあさんに「一番おすすめのだがしを下さい」と言った。

おばあさんは店の奥から小さな箱をあけながら、「これは私も食べたことがない特別なだがしだよ」としぶい顔をして言った。

女の子は少しびっくりした様子でおばあさんを見ている。でもそのだがしは、特別なだがしなので女の子はさいふからお金を出し、買って帰った。

夜、女の子がそのだがしを食べてみるとふしぎなことに背が小さくなってしまった。女の子は背が小さくなったことがとてもイヤで、今すぐだがし屋のおばあさんに話をしようと行ってみるといつもやっていただがし屋はシャッターがしまっていた。女の子は商店街をぐるっと回ったけれどいつものおばあさんがいなかった。すると後ろからいつものおばあさんの声がきこえてきた。

「こんなところでどうしたの？」

おばあさんの声はいつもより少し小さくて顔も悲しそうな顔をしていた。話を聞いてみると、おばあさんは女の子におすすめしただがしは、背が小さくなってしまうというのを知らずにおすすめしたことがショックでお店をあけることができなかったと女の子に手をあわせてあやまっていた。

次の朝。女の子は、どうしても背が小さいのがイヤなのでだがし屋に行き、おばあさんになおしてもらおうとおばあさんに会いに行った。おばあさんはいつものように店番をしていた。女の子に気づくと、笑顔で「いらっしゃい」と言った。

そして背がもとどおりになりたいと女の子は、大きな声で言ったので、おばあさんはニヤリと笑って口をひらいた。

「むかし私は、まほう使いでいろいろな人のことを助けてあげていた」

女の子はポカーンとしていたが、おばあさんは話を続けた。

「だから背をもとどおりにしてあげよう」

女の子は、大きくうなづいておばあさんは、まほうの言葉を言うと、女の子の体をさわり目をつぶってまたとなえ始めた。

すると、女の子はニョキニョキと伸びもとどおりになっていた。女の子は、とてもうれしくておばあさんにだきついた。それから女の子は毎日のようにだがし屋に行き商店街の小さなじょうれんさんになった。